TADOKU JUNIOR　ピノッキオの冒険　★★★☆☆ ふつう　809語

Pinocchio, Chapter 7

第7章　ゼペットさんの朝ごはん

Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)（1883年の本）　原文そのまま　朗読：Mark F. Smith

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　ろうやから帰ってきたゼペットさん。足をなくしておなかをすかせたピノッキオに、自分の朝ごはんのナシをあげますが、ピノッキオは「皮をむいて」と……。



Geppetto returns home and gives his own breakfast to the Marionette

The poor Marionette, who was still half asleep, had not yet found out that his two feet were burned and gone. As soon as he heard his Father's voice, he jumped up from his seat to open the door, but, as he did so, he staggered and fell headlong to the floor.

In falling, he made as much noise as a sack of wood falling from the fifth story of a house.

"Open the door for me!" Geppetto shouted from the street.

"Father, dear Father, I can't," answered the Marionette in despair, crying and rolling on the floor.

“Why can’t you?”

“Because someone has eaten my feet.”

“And who has eaten them?”

“The cat,” answered Pinocchio, seeing that little animal busily playing with some shavings in the corner of the room.

“Open! I say,” repeated Geppetto, “or I’ll give you a sound whipping when I get in.”

“Father, believe me, I can’t stand up. Oh, dear! Oh, dear! I shall have to walk on my knees all my life.”

Geppetto, thinking that all these tears and cries were only other pranks of the Marionette, climbed up the side of the house and went in through the window.

At first he was very angry, but on seeing Pinocchio stretched out on the floor and really without feet, he felt very sad and sorrowful. Picking him up from the floor, he fondled and caressed him, talking to him while the tears ran down his cheeks:

“My little Pinocchio, my dear little Pinocchio! How did you burn your feet?”

“I don’t know, Father, but believe me, the night has been a terrible one and I shall remember it as long as I live. The thunder was so noisy and the lightning so bright—and I was hungry. And then the Talking Cricket said to me, ‘You deserve it; you were bad;’ and I said to him, ‘Careful, Cricket;’ and he said to me, ‘You are a Marionette and you have a wooden head;’ and I threw the hammer at him and killed him. It was his own fault, for I didn’t want to kill him. And I put the pan on the coals, but the Chick flew away and said, ‘I’ll see you again! Remember me to the family.’ And my hunger grew, and I went out, and the old man with a nightcap looked out of the window and threw water on me, and I came home and put my feet on the stove to dry them because I was still hungry, and I fell asleep and now my feet are gone but my hunger isn’t! Oh!—Oh!—Oh!” And poor Pinocchio began to scream and cry so loudly that he could be heard for miles around.

Geppetto, who had understood nothing of all that jumbled talk, except that the Marionette was hungry, felt sorry for him, and pulling three pears out of his pocket, offered them to him, saying:

“These three pears were for my breakfast, but I give them to you gladly. Eat them and stop weeping.”

“If you want me to eat them, please peel them for me.”

“Peel them?” asked Geppetto, very much surprised. “I should never have thought, dear boy of mine, that you were so dainty and fussy about your food. Bad, very bad! In this world, even as children, we must accustom ourselves to eat of everything, for we never know what life may hold in store for us!”

“You may be right,” answered Pinocchio, “but I will not eat the pears if they are not peeled. I don’t like them.”

And good old Geppetto took out a knife, peeled the three pears, and put the skins in a row on the table.

Pinocchio ate one pear in a twinkling and started to throw the core away, but Geppetto held his arm.

“Oh, no, don’t throw it away! Everything in this world may be of some use!”

“But the core I will not eat!” cried Pinocchio in an angry tone.

“Who knows?” repeated Geppetto calmly.

And later the three cores were placed on the table next to the skins.

Pinocchio had eaten the three pears, or rather devoured them. Then he yawned deeply, and wailed:

“I’m still hungry.”

“But I have no more to give you.”

“Really, nothing—nothing?”

“I have only these three cores and these skins.”

“Very well, then,” said Pinocchio, “if there is nothing else I’ll eat them.”

At first he made a wry face, but, one after another, the skins and the cores disappeared.

“Ah! Now I feel fine!” he said after eating the last one.

“You see,” observed Geppetto, “that I was right when I told you that one must not be too fussy and too dainty about food. My dear, we never know what life may have in store for us!”

ゼペットさんが家に帰ってきて、自分の朝ごはんをあやつり人形にあげます

かわいそうなあやつり人形はまだ半分ねぼけていて、両足がもえてなくなってしまったことに、まだ気づいていませんでした。お父さんの声を聞くとすぐ、ピノッキオは戸を開けようといすから飛び上がりました。ところが、そのとたんによろけて、床に頭からたおれてしまいました。

たおれたときの音は、まきの入ったふくろが家の五階から落ちたほどの大きな音でした。

「戸を開けておくれ！」ゼペットさんは通りからさけびました。

「お父さん、大好きなお父さん、開けられないんだ」とあやつり人形は、すっかりこまって、泣きながら床をころげ回って答えました。

「どうして開けられないんだ？」

「だれかがぼくの足を食べちゃったから。」

「それで、だれが食べたんだ？」

「ネコだよ」とピノッキオは答えました。部屋のすみで、ネコがかんなくずにじゃれて遊んでいるのが見えたからです。

「開けなさい！いいか」とゼペットさんはくり返しました。「開けないと、入ったらうんとおしおきするぞ。」

「お父さん、信じて。立てないんだよ。ああ、どうしよう！ああ、どうしよう！一生、ひざで歩かなくちゃならないんだ。」

ゼペットさんは、この泣き声やさけび声も、あやつり人形のまたいつものいたずらだと思って、家のかべをよじ登り、窓から中へ入りました。

はじめはとてもおこっていましたが、ピノッキオが床にのびていて、本当に足がないのを見ると、とても悲しく、かわいそうになりました。ピノッキオを床からだき上げ、なでたり、だきしめたりしながら、ほおになみだを流して話しかけました。

「わしのかわいいピノッキオ、大事なかわいいピノッキオ！どうして足がもえてしまったんだい？」

「わからないよ、お父さん。でも信じて。ひどい夜だったんだ。一生わすれないよ。かみなりはすごくうるさくて、いなずまはすごくまぶしくて――それにおなかがすいていたんだ。それから、もの言うコオロギがぼくに『きみが悪いんだから、しかたないよ』って言って、ぼくが『気をつけろ、コオロギ』って言ったら、『きみはあやつり人形で、頭まで木でできている』って言うから、金づちを投げたら死んじゃったんだ。コオロギのせいだよ。ぼくは死なせるつもりなんかなかったんだもの。それから、炭火の上にフライパンをのせたら、ヒヨコが飛んでいっちゃって、『また会いましょう！ご家族によろしく』って言ったんだ。それからもっとおなかがすいて、外に出たら、ナイトキャップのおじいさんが窓から顔を出して、ぼくに水をかけたんだ。それで家に帰って、まだおなかがすいていたから、足をかわかそうと火ばちにのせたら、ね

むっちゃって、そしたら足はなくなったのに、おなかのすいたのはなくならないんだ！うわーん、うわーん、うわーん！」そしてかわいそうなピノッキオは、ずっと遠くまで聞こえるほど大きな声で、泣きわめきはじめました。

ゼペットさんには、このごちゃごちゃな話は、あやつり人形がおなかをすかせているということのほかは何もわかりませんでしたが、かわいそうに思って、ポケットからナシを三つ取り出して、さし出しながら言いました。

「この三つのナシは、わしの朝ごはんだったんだが、よろこんでおまえにあげるよ。これを食べて、泣くのはおやめ。」

「食べてほしいなら、皮をむいてよ。」

「皮をむくだって？」とゼペットさんはとてもおどろいてたずねました。「おまえが食べ物にそんなにぜいたくで、好ききらいをするとは思わなかったよ。よくない、とてもよくないぞ！この世の中では、子どものうちから、何でも食べられるようにしておかなくちゃいけない。先に何が待っているか、わからないんだからね！」

「そうかもしれないけど」とピノッキオは答えました。「皮をむいてくれなきゃ、ナシは食べないよ。皮はきらいなんだ。」

そこで、人のいいゼペットさんはナイフを取り出して、三つのナシの皮をむき、皮をテーブルの上に一列にならべました。

ピノッキオはナシをひとつあっというまに食べて、しんを投げすてようとしましたが、ゼペットさんがそのうでをおさえました。

「いやいや、すててはいけない！この世の中のものは、何でも何かの役に立つかもしれないんだよ！」

「でも、しんなんか食べないからね！」とピノッキオはおこった声でさけびました。

「さあ、どうかな？」とゼペットさんは落ち着いてくり返しました。

そしてあとで、三つのしんは、テーブルの上の皮のとなりにならべられました。

ピノッキオは三つのナシを食べてしまいました。いや、むさぼるようにたいらげてしまいました。それから大きなあくびをして、なきごとを言いました。

「まだおなかがすいてるよ。」

「でも、もうあげるものは何もないんだよ。」

「本当に、何も――何もないの？」

「あるのは、この三つのしんと皮だけだ。」

「しかたないなあ」とピノッキオは言いました。「ほかに何もないなら、それを食べるよ。」

はじめはいやそうな顔をしましたが、ひとつ、またひとつと、皮もしんもなくなっていきました。

「ああ！これでいい気分！」と、最後のひとつを食べてからピノッキオは言いました。

「ほらね」とゼペットさんは言いました。「食べ物に好ききらいをしたり、ぜいたくを言ったりしてはいけないと言ったのは、正しかっただろう。ねえ、先に何が待っているかなんて、だれにもわからないんだよ！」

たんご と クイズ　第7章　ゼペットさんの朝ごはん

cat ネコ	**window** 窓	**pears** ナシ
pocket ポケット	**breakfast** 朝ごはん	**knife** ナイフ
skins 皮	**core** （くだものの）しん	

Q1 ピノッキオは、だれが足を食べたと言った？

① ネズミ　② ネコ　③ 犬

Q2 ゼペットさんがピノッキオにあげた朝ごはんは？

① 三つのナシ　② パン　③ たまご

Q3 最後に、ピノッキオはナシの皮としんをどうした？

① すてた　② ゼペットさんにあげた　③ ぜんぶ食べた

こたえ

Q1　②　部屋のすみでネコがかんなくずにじゃれているのを見て、「ネコだよ」と答えました。本当は火ばちでもえてしまったのです。

Q2　①　ポケットから三つのナシを取り出し、「わしの朝ごはんだったんだが、よろこんであげるよ」と言いました。

Q3　③　まだおなかがすいていたので、はじめはいやな顔をしながらも、皮もしんもぜんぶ食べてしまいました。

原田英語の多読ベストジュニア
本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。
haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #500（Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)、1883年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Mark F. Smith（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは 3 重チェック。人の目でも順次確認しています。